

Kushiro

Art Map

釧路 まちなか アートマップ



みんなでまわってね!

たのしく
あるく
のーだー

釧路市立美術館 Kushiro City Museum of Art

釧路市生涯学習センター3階

〒085-0836 釧路市幣舞町4番28号
TEL0154-41-8181・42-6116 (直通) FAX0154-41-8182

釧路ゆかりの作家たち

毛綱 毅曠

1941(昭和16)年-2001(平成13)年
釧路出身の建築家。釧路市内に「釧路フィッシャーマンズワーフMOO」「釧路市立博物館」など、東洋思想をイメージ化した独創的なデザイン建築物を設計しました。1985年釧路市立博物館、釧路市湿原展望台の設計により日本建築学会賞受賞。

中江 紀洋

1943(昭和18)年-
釧路市生まれ。釧路市・幣舞公園の「施設受信機」、釧路市生涯学習センター展望テラス「BAY GATE」のほか、札幌芸術の森に「PILE WAVE」、とうや湖ぐるっと彫刻公園に「生彩」など、道内各地に野外彫刻を設置。木を主な素材に、抽象の立体造形を制作しています。

舟越 保武

1912(大正元)年-2002(平成14)年
道東の四季の像「春」の制作者。高村光太郎賞、中原悌二郎賞等を受賞し、1999(平成11)年文化功労者。
釧路市では、道東の四季の像・春のほか、釧路市生涯学習センター2階の「杏」、マリントボス前「海の顕彰碑/渚・渉・瀟」などが設置されています。

佐藤 忠良

1912(明治45)年-2011(平成23)年
道東の四季の像「夏」の制作者。生き生きとした女性像を数多く制作し、フランス・ロダン美術館で展覧が開催されるなど、国内外で高い評価を得ました。釧路市民文化会館には、壁面レリーフ「鶴」が設置されています。

柳原 義達

1910(明治43)年-2004(平成16)年
道東の四季の像「秋」の制作者。ロダン、ブールデルに傾倒し一貫して具象彫刻を追究しました。43歳にして学びなおしを決定し、単身で渡仏。帰国した後も彫刻家として活動を続け、人間像やハトを題材にした「道標」のシリーズで知られています。

本郷 新

1905(明治38)年-1980(昭和55)年
道東の四季の像「冬」の制作者。戦没学生記念像「わだつみのこえ」など、モニュメンタルな作品を全国各地に設置、生命力に満ちた力強い作風は広く知られています。釧路市国際交流センター前には、「釧路の朝」が設置されています。

北大通 モニュメントマップ

北大通2丁目から4丁目までの街路には、8基のオブジェが設置されています。1993(平成5)年に釧路第一商店街振興組合により、アートロードの一環として整備されました。

湿原や海など釧路をイメージした作品が多く、中でも「未来」「希望」は釧路市内の小学生からイメージデザインを公募し、立体造形家・中江紀洋が制作した作品です。

幣舞橋の道東の四季の像とあわせ、駅からのびるメインストリートを彩っています。



立像「春」について

長崎の26聖人の記念像の制作には4年半かかりました。この幣舞橋の「春」はただ1体で1年半かかりました。今までに最も永くかかった制作です。

永くかかればいいというものではないのですが、私としてはこれ以上出来ないというぎりぎりのところまで仕事に打ち込みました。

出来がよいかどうかは自分には解らないのですが、全力を尽くしたということで私は満足しています。

4体の彫像の中で私のものは布をまとっていますが、私の作るものはいつも動勢が少ないので、布の流れる線によって動きを補ったつもりです。

釧路の皆様はこの4つの彫像が親しみの心を持って迎えられるように願っています。

舟越保武



舟越保武 道東の四季「春」
1977(昭和52年)

作者の言葉

幣舞橋・道東の四季の像

親しまれています。



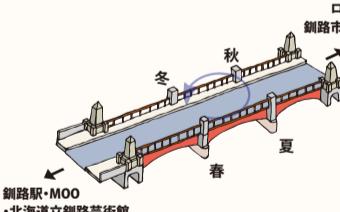
佐藤忠良 道東の四季「夏」
1977(昭和52年)

「夏」の像を終えて

永い冬とのたたかきからようやく抜けだした春が、霧をおして贈ってくれた太陽。花たちは一斉に開き、つかの間の道東の夏に、人々のエネルギーは若々しく弾む。そんな気持の彫刻になってくれれば...と希っている。—今となつては多少面映ゆいこの短かな文は、幣舞橋ブロンズ像設置概要の中に私が載せたものです。2度の試作を経て、本制作に入ってから約1か年近くを、この像にかり切りになってしまいました。時間をかけたからと云って、こればかりは必ずよくなるとは限らないもので、この像にかかわるいろんな状況の中で、私は相当肩に力が入っていたようです。制作を終えて私は今、逃げ言葉を探そうとは思っていませんが、最初に意気込んでいたほどにはいかないものであるということ、今度もまた、私のこれまでの、どの作品にも感じてきたと同じ感慨を今更の如く思い知らされているところです。

佐藤忠良

現在5代目となる幣舞橋。北海道三大名橋の一つと謳われ、長年親しまれてきた前代の橋が、老朽化のため架け替えられることになったとき、市民の中から「新しい橋も名橋、幣舞橋としての名に恥じないものにしよう」との声があがり、「新幣舞橋の造形を考える市民懇話会」が発足。



柳原義達 道東の四季「秋」
1977(昭和52年)

釧路の秋

私は北海道へ、鴉の取材にたびたび出かけた。いつも通る釧路の港街は特殊で、あの夕日とあの霧の景色は忘れることが出来ない。

この美しい釧路の景観の中に幣舞橋がかかっている。美しい橋の記憶は、私の心を鮮明にとらえる。この橋が新しく、かつ近代感覚をもって作られるという。私は、この美しい橋の上に置かれる「道東の四季」の彫刻を引き受けることになった。しかも、その主題は秋である。秋は私にとって、最も色彩豊かな、また実り多き時である。この美しい時を私が作ることは、大変に幸せである。しかし、内地で考える釧路の秋と、釧路に住んでいる市民の秋とは全く異なる世界であるはずだ。

釧路の秋は、冬に向って身構える秋である。美しい景観の中に、極寒を迎えて立つ私の像は、生やさしいものであってはならない。

心の中に、冬を迎えてのレジスタンスが蠢き、極寒を乗り切らなければならないそこには、苛酷なまでの強い人間の精神力が求められる。きれいな感覚よりも厳しい美しさが私の主題を覆うだろう。「道東の秋」は、このような私の心のあらわれであってほしい。

柳原義達



本郷新 道東の四季「冬」
1977(昭和52年)

「冬」に寄せて

“裸体の立像で「冬」を表現せよ”が私に与えられた命題である。秋が深まるにつれて、北国の人々は冬にそなえてさまざまな準備をする。物にも心にも用意が要る。そしてまた、冬が深まるにつれて人々は暖い春の日ざしを待ち望む。だが、北国の人々にとっても、春夏秋冬は等価として存在する。こんな理屈のようなものを下敷にしながら、私は私の「冬」を考えてみる。

釧路の日没はきわだって美しい。その水平線に向って私の「冬」が立つとすれば、この像は橋の上から西の大空間に向って、何かを呼び何かを訴え、何かを祈るかなのような形になるかと考えた。

私の「冬」がある日は深い霧の中をさまよい、ある日は夕陽の紅を胸いっぱい抱きながらあの大空間と会話を交わすことになれば作者は足りるのである。

